

ヤングケアラー 今がんばっている君へ

小学4年から「小さな保護者」 22歳女性の経験から見たケアの実態

イチオシ

三上健太郎

社会

暮らし・学び・医療

学び・教育・入試

速報

家族・子育て

医療・健康

毎日新聞

2021/8/9 13:00（最終更新 8/9 13:00）

有料記事 3194文字



グループホームで利用者に夕食を作るバレンシア・ジョセリンさん＝川崎市中原区で2021年6月15日、丸山博撮影

政府が4月に公表したヤングケアラーに関する初の実態調査で、小学生は調査対象から外れた。しかし、一部の研究者の調査で小学生ケアラーの存在は把握されている。小学生時代から家族の世話や介護に追われた子たちは、どんな思いで生きてきたのだろうか――。記者（私）は、子どもを支援する団体などあちこちに取材していた先で、一人の女性に出会った。病気の母に代わり、幼いきょうだいの世話や家事を担い始めたのは小学4年生の時だという。彼女は今、大学4年生。

取材を通じて見たのは、家族への責任感を背負い込んだ「小さな保護者」の姿だった。【三上健太郎/デジタル報道センター】

「今日は何をしていたの?」「お母さんと仲直りした?」

軽度の知的障害者の女性3人が暮らす、川崎市中原区のグループホーム。6月半ばの午後6時過ぎ、一軒家を改装したこのホームでバレンシア・ジョセリンさん（22）＝フィリピン国籍＝が同年代の利用者に話しかけていた。



バレンシアさんは週2回、ここで調理や掃除のアルバイトをしている。この日の夕食の献立は肉じゃが、ピーマンとハムのサラダ、みそ汁、白ご飯にフルーツ。手際よく調理したナスの煮浸しと、これから焼くサケは翌日の朝食用だ。「いつものように、おいしい」。利用者の一人は箸を動かしながら、「（バレンシアさんは）話を聞いてくれるのがうまいよ。楽しい時間」

グループホームで利用者の話を聞くバレンシア・ジョセリンさん（右）＝川崎市中原区で2021年6月15日、丸山博撮影

とにっこり。もう一人の女性も「年が近いから話しやすい」と笑顔をみせた。

通訳や家事、弟の世話

フィリピン出身の母は1987年ごろに初めて来日し、日本とフィリピンを行き来した。バレンシアさんもフィリピンで生まれ、生後半年で来日。以来、川崎市で暮らしている。フィリピン出身の実父の記憶はない。幼いころは、母と日本人男性との間に生まれた兄らも一緒に暮らしていたため、家庭での会話は日本語だった。

小学4年の時に、母が子宮がんと診断された。このころ、同居していたのは母、17歳年上の姉、2歳年下の弟、弟と同学年の姉の息子。タガログ語が主言語の母と姉は、日本語は話せても読み書きが不得手で、学校の書類を読んで説明したり、提出書類を書いたりするのはバレンシアさんの役目だった。弟が学校を休めば、連絡帳には「お休みさせていただきます」と友達の親のまねをして書いた。

ほどなく母は入院し、姉と2人で家事を担うことになった。朝は6時台に起き、パンや目玉焼きを作って朝食を準備。弟たちを起こして食べさせ、洗濯物を干して学校へ。下校すると宿題を済ませ、スーパーに買い出しに行き夕食を作る。仕事から帰った姉が夕食を担当してくれることも多かったが、これらを一人でこなさなければならない日もあった。



バレンシア・ジョセリンさんが作った肉じゃが＝川崎市中原区で2021年6月15日、丸山博撮影

「昔から食器を洗ったり、ご飯を炊いたり母の手伝いをしていたので、その延長線。周りの子とはちょっと違うことをしているだけで、さみしいとかつらいとかはあまり思わなかったです」。家族の世話や家事を始めたころは、さほど違和感はなかったと振り返る。だが、世話が日常化する中で次第に疲労はたまっていった。周りの人から「いつも偉いね」と褒められてうれしい半面、「私しかいない」という重圧感も増していった。

「我慢すれば何とかなる。大丈夫」

入院中の母は「ごめんね」と言ってくれた。疲れた気持ちや甘えたい思いはあったが、心配をかけまいと本音は小さな胸にしまい込んだ。学校の先生も母の入院を把握し、「お母さんの調子どう？」と気にかけてくれたが、家で何をしているかなど具体的なことを聞かれた記憶はない。

弟が出し忘れた書類があれば、先生は直接、催促してきた。「私がやらないとどうにもならない。自分が頑張ればいい。我慢すれば何とかなる」。そう自分に言い聞かせるしかなかったから、「おうち大丈夫？」と聞かれれば、「大丈夫」と答えた。

母は1年間の闘病の末、2010年に45歳で亡くなった。バレンシアさんはまだ5年生。悲しい気持ちは一番にあったが、「これからどうなってしまうんだろう」という不安も強かった。

母の死後も、姉との家事分担は続いた。落ち着きがなく、なかなか言うことを聞いてくれない弟の面倒を見るのも変わらなかった。弟の担任に会うたびに「授業をちゃんと聞かない」と聞かされることが嫌だった時期もある。弟への不満や家事の疲れを感じるたび、母の写真を保存した携帯電話を取り出した。母が元気なころ、自宅で何気なく撮ったツーショット。「お母さんがいればなあ」。何度もそう思った。

日本語が第1言語でない家族のために通訳をする、病気の母に代わって買い物・料理・掃除・洗濯などの家事を担う、幼いきょうだいをケアする――。バレンシアさんが小学生から担ってきたことは、ヤングケアラーの代表的な類型に当てはまる。政府が5月に公表した支援策には、きょうだいのケアを担う子どもがいる家庭への家事支援サービスを検討したり、子どもを救済するために教育や医療など多機関が連携したりすることなどが盛り込まれたが、当時、バレンシアさんが頼る先は限られていた。

同級生の父母との出会いが支えに



グループホームで利用者の話を聞くNPO法人「ホッとスペース中原」代表の佐々木炎さん＝川崎市中原区で2021年6月15日、丸山博撮影

支えたのは、川崎市中原区のNPO法人「ホッとスペース中原」の代表で牧師の佐々木炎（ほのお）さん（56）と妻の直子さん（56）だ。バレンシアさんが小学1年生の時に同級生だった佐々木さんの長女からクリスマス会に招かれ、教会の日曜礼拝に通い始めたのが交流のきっかけだった。

母の葬儀は佐々木さんの教会で営まれた。母が眠るひつぎを前に、バレンシアさんは佐々木さん夫妻に「ハグしてほしい」と頼んだ。気丈に振る舞っていたが、直子さんの胸に顔をうずめ、泣きじゃくった。その時、佐々木さんは「気を張って生きてきたんだな。小さな背中にどれだけのものを背負ってきたんだろう」と感じたという。

母と佐々木さん夫妻は同い年。「本当のママにはかなわないけど、いつも応援しているし、ママだと思って接しているよ」と折に触れて声をかけ、学習や金銭面での支援をしてくれた直子さんや佐々木さんの励ましが力になった。中学生になると、自分や弟、姉の息子の弁当作りや夕食の準備に追われることもあったが、陸上部で汗を流したり、姉が仕事から早く帰る日は遅くまで友達と遊んだり、自分なりに時間を工面できるようになった。

自分の経験を強みに変えたい

公立高校に進み、奨学金も得て大学に進学したバレンシアさんに転機が訪れたのは、大学2年だった19年8月。米テネシー州に4カ月間の語学留学をした経験だ。家族と長期間離れるのも、自分のためだけに時間を使うのも初めて。「罪悪感もあったが、自分の成長につながる時間を過ごせたことは幸せだった」と言う。

昨年1月には佐々木さんらの支援もあり、1人暮らしを始めた。高齢者が通うデイサービスや知的障害者らが暮らすグループホームでアルバイトをする中で、「ヤングケアラーだった経験があるからこそ、弱い立場の人たちの気持ちに共感したり、寄り添ったりできるのではないか」と考えるようになった。もし誰かが家事を肩代わりしてくれていたら、もっと友達と遊んだり、やりたいことが見つかったりしたかも――。そんな思いが頭をよぎることもあるが、自分の経験を強みに変えようともがく。

あの中の自分のように、悩みを抱えて無理に強がるような子どもを一人でも多く減らすにはどうしたらいいのか。必要な支援とは。大学4年生。「ヤングケアラー」を卒業論文のテーマに選んだ。

＜今がんばっている君へ バレンシアさんのメッセージ＞

きょうだいにはなるべくさみしい思いをさせないようにする一方で、自分は親に甘えられずに我慢したこともある。一人で抱え込みすぎず、信頼できる人に話したり、自分の好きなことができる時間を大切にしたりして、気持ちをリフレッシュしてほしい。



バレンシア・ジョセリンさん＝川崎市中原区で
2021年6月15日、丸山博撮影

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.